

よみ・かき・ことば集(一)

どうひょう

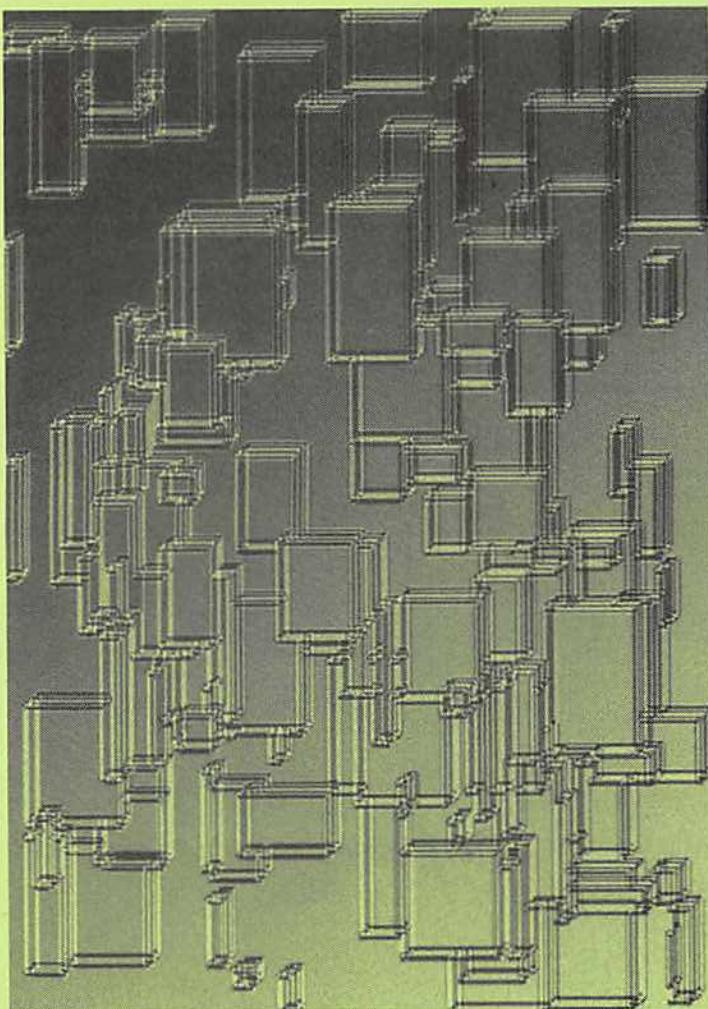
しょう

「道標」抄

土方 鐵

ひじかた

てつ



# 1

「共生」<sup>きょうせい</sup>といふことばを、耳<sup>みみ</sup>にするようになつて久しい。共<sup>とも</sup>に生きるといふのは、いいことばである。だが、その実せんは、やさし

そうにみえて、實<sup>じつ</sup>にむつかしい。

北海道<sup>ほっかいどう</sup>にアイヌの長老<sup>ちょうろう</sup>をたずねて、話をうかがつたことがあつた。そのおり、自然<sup>しぜん</sup>と共<sup>とも</sup>に生<sup>い</sup>きてきた生きかたにふれて、感動<sup>かんどう</sup>した。「山<sup>やま</sup>でわらびをみつけると、アイヌは、三分<sup>さんぶん</sup>の一<sup>いち</sup>ぐらいは、かならず残<sup>のこ</sup>す。そうすれば、来年<sup>らいねん</sup>、神<sup>かみ</sup>のめぐみがある」というのだ。

とおるたびに、桜が満開だとあおいでいた  
が、もう散り果てて、ちいさな葉が日日ひろ  
がりだした。

い。  
地には、しべが散らばつてゐる。うす赤色あかいいろ  
の、二センチほどのもので、それもまた美しうつくしく

ひび  
ひく。  
ひと  
さくら  
かい  
みどり  
こ

ひろがる葉も、だんだん緑を濃くして  
人は桜の開花には、さわぎたてるが、  
葉桜の美しさには、無関心なのはどうしてだ

以前は、電車に乘ろうと思えば、窓口で行き先をつげて、切符を求めることができた。しかし今は、自動販売機だから、文字を読みとる必要がある。私鉄によつては、ひらがなの駅名と運賃の一らん表をかかげているところがある。

しかし、もつとややこしいのは、私鉄から私鉄へ乗りついでいくばあいの、切符の求めかただ。文字の読めるお年寄りでも、その複雑さにとまどつているのを、よくみかける。

離婚した母と逢う日は補聴器の電池をそうつ  
とつめかえておく  
作者は十五歳。女性らしい。離婚している  
両親。その母と時どき逢うのだろう。きょう  
は、その約束の日。聴覚に障害のある彼女は、  
母の声を聞きもらさないために、電池をつめ  
かえたのだ。そのいじらしさ。大岡信は、  
「これを短歌にした時、彼女は自分の境遇に  
受け身で耐えるだけではない生き方にすでに  
気づいている」と評している。

先さきごろから、どうも体調たいちょうがおもわしくなく、とくにくびや肩かたが、こつてつらく、そのうえ頭ずつ痛つうがはげしい。最初さいしょ、整形外科せいけいが科へいったら、レントゲンをとつて、くびの骨ほねの老化ろう化かが、あらわれている、とのこと。はりをうつてもらつたり、いろいろやつたが、一向いつこうによくなつてくれない。

そういううちに、目めが変へんになつた。見えにくいのである。あわてて眼科がんかへいったところ、緑内障りょくないじょうだとう。(つづく)

わたしは先日、ある新聞記者から、名刺をもらつた。そこには、点字が、うちだされていた。ポケットに名刺をしまいながら、わたしは、自分の欠落に、思いいたしていた。

なぜこういうことを書くかといえば、自分が緑内障による失明の危機を、体験したからに、ほかならない。

人間というものは、なにごとも、自らにふりかからないかぎり、考へないというところがある。

人は樹木にかこまれると、安らぎをおぼえる。なぜだろうか。

河合雅雄さんによると、緑に包まれ木の上で生活していたサルから、進化した人の遺伝子DNAのなかには、しつかりと緑の記憶が、プログラムされている、というのである。だから、森にいると、人は安らぎを覚えるのだそうだ。

人のふるさとは、緑の森だということになる。その森の現状はどうか。

映画「遠い夜明け」をみにいった。評判どおりの、みごたえがあった。もつとも感動したのは、アパルトヘイト（みなみ南アフリカ共和国）の有色人種差別政策（ゆうしょくじんしゅさべつせいさく）のもとで、黒人がすばらしくたたかっていることである。

ブラック・イズ・ビューティフル!! 黒は美しいというのは、いってみれば、黒人を劣等視する考えに対する逆転である。

いかにして、もたされた劣等感から、解放されるかは、きわめて大事なテーマである。

あいかわらずの病院がよいが続いている。  
 うるしの木<sup>き</sup>だろう、葉<sup>は</sup>が、赤くなつて美しい。  
 それに、今日の、通院のとちゅうで気づいた。  
 この季節<sup>きせつ</sup>、風景<sup>ふうけい</sup>が、あざやかに、美しくなる  
 ので、たのしい。

うるしの紅葉<sup>こうよう</sup>に、気づいて、あたりをみま  
 わすと、秋の深<sup>ふか</sup>まりが、あざやかである。す  
 すきのほが、やや、ほほけるのが、でてきて  
 いる。やがて、枯<sup>か</sup>れがめだつていく、その移<sup>う</sup>  
 り変わりをみているのも、いい感じだ。

芭蕉が、ある家へ客にいったときのことである。夕食のあと（ろうそくの灯を早くかたづけて、油灯にかえてほしい）といつた。

「夜の更くること目に見えて心せはしき、となり」というのである。つまり、ろうそくがへることで、夜のふけるきまが、目に見え、心が落ち着かぬ、というのである。そしてつづけて、「命もまたかくのごとし」という。つまり、命もまたこのように、移ろいやすいものである、というのである。

今年、冬は実際に長く感じられた。年齢とともに、ますます、そう感じられる。わたしは、若い時、肺結核で、長い療養生活をよぎなくされた。その後遺症として、慢性気管支炎がある。

冬になると、毎年、風邪のような症状で、苦痛がある。わたしにとつて、冬は耐える季節なのだ。

だから、わたしは、枯木に同化するのだ。

(つづく)

葉を落とした樹木が、寒そうにたつていて、もう枯れ果てたのか、などと錯覚しそうになる。ところが、その枯れた木が、死んでいかつたのである。季節のめぐりくるのを、ひたすら待ちつづけていたのだ。

よくみると、寒気のなかで、芽の準備をしていて、ふくらみを持ちはじめている。歳時記は、これを「冬芽」としている。

芽は春になると、急にふくらみ、色を濃くはじめめる。葉や、花をひろげはじめるのだ。

※ 本書は、読み・書き・ことばを学習する方のために、土方 鐵氏の『道標』（一九九五年五月・解放出版社）から抄出した文章を構成したもののです。

## 「道標」抄

著者 土方 鐵

識字・日本語センター

〒五五六・〇〇二八

大阪市浪速区久保吉一・六・一二

大阪人権センター三階

電話・FAX 〇六（六五六一）九九八八

※ 本教材が必要な場合は、識字・日本語センターまでご連絡ください。電話の受付は、平日の午後一時～五時です。送料を負担していただく場合があります。

※ 本教材は、平成十三年度文部科学省委嘱「識字・日本語読み書き学習における教材研究事業」の一環として、大阪府教育委員会が発行しました。